

R40.25

2 of 5

*TESSAKU, Tessaku SAA, Vol. 2, 1944

67/14
C

鐵柵

第二号
特別号

松原信雄

1944

目 次

編輯後記

卷 頭 言

ツルレーキが日本へ帰る途中の一ホテルであつても、このホテルに随分長い間泊らなければいけないと思ふ。此處には二万人近くの間人が住んでゐるし、交換船は何時来るかはつきり判らない。かりに一年三回来るとする。カナダや南米の同胞を乗せるのだから、當所かう一回約千人が帰られるとしても、年三千人となり、全部帰國するとしたら、少くとも七年を要する。併し今の通りで行けば十年以上も掛かるだらう。誰が先は帰り、誰が後に残るか知らないが、道中の一ホテルにしては、あまりにも長いやうな氣がする。

ツルレーキを道中の一ホテルと言ふよりは、歸國後の生活力の養成所と言つた方が眞実に近い。幾らかの金を政府より貰へると期待して、日本に歸るがうるやう、むしろ歸らない方がいい。國家に迷惑を掛けるのは眞の日本人の心でないからだ。歸國後役に立つ人間になる爲のツルレーキであつて欲しい。日本人として清く生き、北米移民の暮を美しく開ぢて欲しい。

戦争が永く続いたら、私たちは此處で十年内も生活し、此處で成長し、喜び、悲しみ、此處で自己の生活を刻んで行く。「かりそめの生活」と言ふけれども、將來の『かりそめでない生活』は果してどんな形でやつて来るだらうか。鉄砦の中を歩きながら、それを考へるごともある。考へさせられるごともある。

座

談

会

「創刊号を語る」

出席者

泊良彦・加川文一・同しづ
矢尾嘉夫・山城正雄
野沢襄二・河合一夫

加川 野沢君、雑誌が出来上つてほつ
としたでせう。

野沢 まったくこんなことするもんぢ
やありませんね。

加川 えうかつたな、生みの苦しみだ
ね。然しオニ号からは幾分楽にな
るだらう。次の編輯長は河合君だ
つたね。

河合 野沢なんかそばへも寄せつけな
い、いいものを作つて見せますよ。

野沢 大きく出なすつたね。矢尾さん
この雑誌どう思ひますか。

矢尾 いいですね。まあアメリカがや
一番いいでせうね。

山城 ツールレーキがや確かに一番だ
な。下がないからな。(笑声)

野沢 表紙はどうですか。
矢尾 あつさりしてゐるゝですね。

鉄筆は大城といふ娘が一人でした
んですか。よく書けてゐますね。

野沢

まったく大城君が一番良く働いてくれましたよ。あの娘がいなかったらこの雑誌はまだく／＼出来上つていなかったでせうね。

加川 そうだな祝賀会でも開いてうんと今キンでも食べさせようぜるんだね。

野沢

目次のカットはどうですか。

矢尾 これは一体何を意味してゐるんですか。

加川 苦難の道の表徴でもあり、日本

へ歸る帆前船ださうです。仲々し

やれてゐるでせう。(笑聲)

野沢

これでもいろ／＼苦心しましたよ。

河合

どうですか、みんなが作品の批評をし合つたら、赤裸々な氣持で、

加川 そうですね。一つやりますか。

山城

「キャンブ雜感」をうりますか、僕のは一番最後にして下さい。どうせよく言はれないことは分つてゐるから。

河合

免に角これはいゝと思ひますね。やはりこういう作品は山城でなければ書けないな。

野沢

しかし山城は一人よがりな言葉をあまり使ひすぎるよ。表現の仕方が。川中島のストロブとか、キャンブの紫式部とか。陰喩法かも知れないが、僕は好かんよ。

加川

そうだな。「キャンブ雜感」はいには違ひないが、少し脱線氣味なところがあるね。

山城

僕の氣持はそれだけ複雑なんだね。

河合

自惚れるなよ。(笑聲)

野沢 裸の言葉、はどうですか。

河合 難のない作品だと思ふな。

加川 そうだな、そういへばさうだが

僕としては惹かれるところが少い。

この人には少し氣に掛かるところ

があるんだ。あるところで、作者

は、會話なり、描字なりする、そ

の奥に何かひそんでゐるものがあ

りそうに書かれてゐるが實際はそ

れほどでもない。——　　さういふ

ことを感じたな。

野沢 「君が像を彫れり」はどうですか。

山城 (朗讀し始める)

河合 (樋江井) いいですね。(笑聲)

加川 そうだな、まあ悪くはないだら

うな。

野沢 加川さん、それが面白いんです

よ。河合がこの詩を作った翌日で

したが、向題の彫刻を、夜の夜中

に、失態したと言つて鑿で叩き壊

してしまふんです。あの時の感情

をもう少し續けたらいいと思ふん

ですがね。

加川 そうだね。それに最後の二行が

どうも氣にかゝるな。あそこを

んなに詩法としてまとめしまは

ないで、もつとなんとかならなか

ったかな。そうしたらもつといふ

ものになつてゐたと思ふんだがな。

一人しづかになつて、じつくり讀

むといふ詩だね。

河合 僕は初めて文語体の詩を書いて

みたんですが、別に加川さんを真

似たわけではないんですが、あの

時文語体で書く氣持に襲はれたと

でも云ひますか。

野沢 ばかに難かしんだね。(笑聲)

山城 外川さんの隨筆はいいですね。

加川 あれはいいな、今月のポストン

文芸に外川君の詩が載つてゐましたかね、よくなかつたな。この隨

筆は最近のうで一番いいと思ふな。

野沢 矢尾さんの短歌はどうですか。

河合 短歌ときたら僕はいいよ、だめ

だね。

ミヤス加川 だけど詩を書かうとなさ

る方が、短歌ぐらひやうなくつち

や。

野沢 もうですね、鑑賞眼だけは必要

ですね。

河合 さうかな。

山城 僕はまだ讀んでゐないんだ。

ミヤス加川 うまく逃げるわね。(笑聲)

野沢 矢尾さん、題は何と読むんです

か、テキキヨですか。

矢尾 タクキヨ(讀居)です。

野沢 どんな意味ですか。

矢尾 この生活のやうに、とらはれ

の住ひとでもないふんですか。

野沢 泊さん、あの短歌の中でどれが

一番いいんですか。

泊 さうですね、靈柩車なんかいいで

すね。

矢尾 最後の國こぞるは不完全氣味で

あまり好くないんです。

山城 僕は一番最初のが好きだな。

野沢 僕は矢尾さんに悪いことをして

しまつたんです。一行に書くべき

だつたんですが、スペースの都合

で二行にしたんですが、よくなか

つたですね。

加川 あれは失敗だつたな。

河合 次は野沢の詩なんだが。

山城 あゝ勝アンボウ(安房)か浪花節

口調の。

野沢 おい、ひどいことを云ふなよ。

山城 あの詩でいいのはカットだけだ

な。

加川 君たちをういふけど、僕はあの

詩を讀んで、野沢君の手腕に感心

したよ。よくあんなにまとめるれ

たね。

野沢 上げたり下げたりわやだね。僕

はあの詩を現状維持と打破の時に

書いたんですが、少し時代後れの

感だが、あの頃は眞剣だったな。

「わからない魅力」はどうですか。

山城 あれはまったくわからない詩だ。

河合 野沢の詩としてはいい方だろう

な。然しわからない魅力とはいふ

が、その魅力なるものの、野沢が

それを心底から求めてゐるか、そ

れが漠然とした氣持を詩った、ま

あ／＼といふ詩だな。

ミセス・加川 綴方教室はいんですね。

山城 いゝな。

ミセス・加川 次号も続けるんでせう。

野沢 日本語學校の方と連絡を取つて

出来るだけいゝ作品を集めるやう

にするんだな。

河合 三人ともそれ／＼の良さをとつ

て面白いですね。次は加川さんの

詩なんだけど。

加川 「鉄柵」を言いた當時はかなりと

思つたが、今讀んでみると、あま

りよくはないね。

矢尾 しかしやっぱり加川さんの詩は

いゝですね。

山城 何といつても古いから。時代は面白くない小説だな。報告文学だな。

野次 ドライですね。

加川 別に悪くないと思ふが、長篇小説だから、何とも言はれないね。

河合 君ずつと続けるんでせう。

河合 出来るだけ続けたいと思ふんだけど、オ一回は失敗したよ。長篇といつても、現在のキャンブ生活の背景にしてゐるから、一つの筋で続けたいと思ふんです。だから人物だけを要へないで、筋は短篇を幾つか集めたふうのものにしたいと思つてゐるんです。

加川 長篇といつても型にはめる必要はないんだし、どんな方法をとつてもそれはかまはないでせう。

次の「舊夢」なんだけど、創作機のないかではこれが一番良かったと思ふね。

河合 いゝですね、小説といふより感想文さんだけど、よくまとまつてゐますね。

野次 僕は「智識人の責任」が一番良いと思ふね。

山城 僕もあれを取るな。

加川 そうかな、僕はあまり賞はない。

河合 僕も加川さんと同感です。

加川 あまり常識的ぢやないかね。

山城 よく此處の生活を表はしてゐると思ふんだけど。

河合 小説として何か足りないものがあらんぢやないだらうか。作家精神といふか。

加川 さうだね。山城君がよくいふ。

陰影とか、何か、さういったものが、

野沢 僕にはよく解らないけど、然し他の雑誌の小説に比べて。

加川 そりや、確かにいんだらう。兎に角一通り文章に苦勞して来た人の作品だね。

河合 咲さんの作品中今度のは良くなかったですね。

野沢 加毎に投書してゐた頃はよかつたんだけど。

山城 行き詰まつたのかな。

加川 まあ全体的に見て、他の雑誌に比して一番内容的にそろつたものが多いことは、いばつてよいいな。

河合 加川さん、オニ号の編輯についてなにか希望はありませんか。

加川 さうだね。一体いつごろ出るん

ですか。

野沢 一ヶ月に一度は出来ないうち。

ニヶ月に一度位に出したいと思つてゐるんです。加川さん、今度何を書きますか。

加川 さうだね。一つ小説でも書いてみるかな。

野沢 評論はどうですか。

加川 さうですね。

河合 そのうちに素晴らしい作でも鉄柵から生れさうですね。楽しみですね。

加川 始めた以上途中で挫折しないで続けたいですね。

山城 みんな負けないうちに勉強するんだな。

(編輯者記)

隨想

資格について

伊藤 正

極く最近のことである。マンザナからの隔離者がいよいよ入所すると云ふのでウオーデンの大募集が発表された。年齢二十五以上五十まで、それに資格が必要だとの区長さんのアナウンスであつた。私の知つてゐる一人の若者がそれに應募して、呼び出しがあつてからインタビューに出かけて行つた。彼は日本人として、はた、横をうつた立派な体格の持主で、年も恰度二十五に達してゐたし、誰の目にも先づ申し分のない候補者に見えた。

色んな質問の後で「君がウオーデンになりたいのは自分の仕事欲しくつてか、それともWRAに協力するためにか」と云ふ意味のことを訊かれたらしい。因よりWRAのために働かうなどと云ふむつかしい量見で求職した訳ではなし、長い間の失業にうんざりして只仕事欲しくつて出かけて行つたのだから、ありのままを正直に答へた。勿論、採用された暁には與へられた職務を忠実に果すだけの職業的良心は充分に持合せてゐたが、そんな事は解り切つたことなので今更口には

もしなかった。だが後で通知するから——と云ふことでひと先づ歸されたらしい。「嘘も方便」と云ふ誰かがくぐる常識、道德の拔道を彼は知らなかったのであらうか？ その夜受け取った通告には「君はウオーデンとしての資格に缺けてゐるから他の部門の仕事を求めるやうに」と、記されてあつたと云ふ。彼ががつかひしたのと言ふまでもなかった。

「正直は馬鹿の内」と云ふが、自分のために働きます——とあつさり打明けられたんぢや、WRAとしてもまさか傭ふ訳には行かないだらう。それにインタビューの目的は、彼が人間として善良であるかどうかと云ふ人格的な問題よりも、ウオーデンとしての資格があるかどうか、その職務に適してゐるかどうかを知らうとしてゐるのだから、こんな赤ん坊みたいな嘘の吐けない、融通性の乏しい、何處か鈍感にさへ見える若者の出現には呆れて終つたらう。そして「君にはその資格がない」と言ひたくなるのは誰しも人情であらう。WRAの狙ふウオーデンとしての資格の第一條件は、何處までもWRAと協調し、その主旨と目的のためのには如何なる努力や活動をも惜まぬとの確約と意思表示にあるに相違ない。「そんなにウオーデンになりたかつたのならWRAのために働きます、協力します」と返答すれば好かつたのに」と、冗談に言ふと「それを考へないでもなかつたか何うしても言ふことが出来なかつた。あまりに見え透いた嘘なので……」と言つてかう彼は口元に寂しさうな微笑を浮べた。私はそこに彼の性格から来る善

良さと素直さを見、無心な子供に向ふ時のやうな自由な喜びに打たれた。そして恐ろくは社会の下積みとしての恵まれることの勤い貪しい生涯を終るであらう彼のことが、あれこれと考へられてなうなかつた。

「心にもない嘘を吐いてパンヤの出前持ちみたいな恰好をして寒い風に吹かれるよりは、眞実のことを言つてはねられた方がよっぽど氣もちが好いぢやないか。今にきつと何か素晴らしい仕事が出て来るよ」と、慰め顔に言ふと「はねられて好い氣もちはしないが、ほんとうのことを言つて終つたのだから仕方がない。今度新しく学校が始つたらダヤネタの口でも取りたいと思ふ」と、彼は言つてゐた。その方が彼の性格にも似合つてゐるし、ヒラでもずっと小学校のダヤネタをしてゐた彼を私は知つてゐる。

自分を偽らないで済む仕事を持つ事。それが何よりの喜びであり安心であり又大切なことでなければならぬ。彼にとつては私にとつてもその他誰にとつてもそれは同じことである。過去の思ひ出の中に、自分を卑しうし自分の魂を偽り傷つけるが如き労働にたづさはった苦々しい経験を持つ私には「職業と良心」と云つたやうな問題が、生々しい実感と慚愧をもつて顧みられるのである。

私が思ふのに、彼も小学校に上つた日から「正直であれ！」と、耳にたこの出るほど繰返し繰返し言ひきかされて来たに違ひない。そして庭の櫻の木をきり倒して父にとがめられた時「私がきりました」と、正直に答へた少年ワシントン

の物語を胸おどろせて聴いたであらう。正直な人間になりたい、正直に世渡りがしたい——と、今日の日まで美しい努力と素直な心を持ちつづけて来たであらう。彼の姿に、泪ぐましい氣もちをさへ感ずるのである。

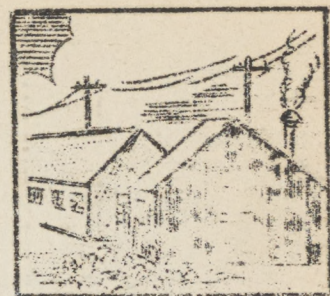
だが正直であると云ふことが人間が世渡りして行く上に最も讃美すべき立派な行爲であるにも拘らず、時としては実社會ではそれが役に立たないばかりか、却つて立身出世の邪魔になるものだと言ふ事實に彼が思ひ及んだとしたら、彼にとつてこれ以上の悲しみはないであらう。今日それに氣づかないにしても明日か明後日、どのみち近い未来にそれは氣づかない筈はない。そして若しも彼がこれまでの素直な生活態度をかぎり棄て、世間並に偽善者の仲間入をしたとしたら、社會はこぞつて彼を嘲罵するに決つてゐる。しかも彼をして偽善者たらしめた直接の動因が社會それ自体の矛盾と缺陷にあるのだと言ふ事實に対しては、誰も責任を負はうとはしないであらう。

正直であれ！——とは道學者も説き社令も亦それを要求してゐるけれども、正直がそのまま讃美せられ尊敬をもつて受け容れられる社會状態にまで吾々の生活が淨化される日はまだ遠い。それは空の星の如く永遠に到達し得られない世界であつて、かかる社會の出現を夢見る者はただ乾き切つた砂をもつて酬みられるであらう。

正直であると云ふ事、これ以上の資格が人間としてあらう筈はない。そして總

ての資格はこの人間としての資格の上に立脚したものでなければならぬ。人間としての美しさと善さと素直さを母胎として、その中からかぐはしく咲き出た花でなければならぬ。正直であつたために職が得られなかつたとしたら、得られなかつたその事にたいしてむしろ感謝すべきである。職業を得る資格を捏造するかはりに、人間としての資格を汚さないで済むと云ふことは、大いなる喜びであり誇りでなければならぬ。

こゝな雪のちうつく寒い冬の日を燦けた風に吹かれてそこらあたりの四つ角やバラックの陰に立つラオーデン諸君の中に、職業にありつくための口答試問には合格しても人間としての資格に落第する者があらうなどとは考へたくない。かかる世想は私を悲しませる以外のなにものでもないのだから………。



コイルケル

水戸川 光雄

メインラインからハイウェイを横切つて二本の線路がキヤムプへはいつてゐる。一本は倉庫へ行き、他の一本は石炭車が入ってくる。其處が所謂コイルケルの仕事場なのである。この辺は首窪地であつたのか、盛り上げた荒い砂の上にレールが敷いてあり、兩側は急な傾斜になつてゐる。其の底に大きな水溜が出来て、去年の冬はスケート場として賑つたさうであるが、今年は二台の散水車が来てキヤムプの道へ水を散くために使はれてゐる。つい先頃迄傾斜面に白ちやけた龍膽に似た花が咲いてゐたのに、毎日ツラクターが来て掘つては固め、固めては掘返してゐる内に何時とか姿を消してしまつた。この様にして線路ぎはの地ならしも大体一段落付いて広場が出来上つたのであるが、それこそ殺風景で、いかにも埋

立地らしいうら淋しさが漂つてゐる。仕事場の東側は丘を越えれば黒ずんだ住民
区域になつてゐる。此處から見るキヤムプは、自分とは何の関りもない。生活に
疲れ果てた敗北者の姿を想はせて、急いで目をそむけたい感じがする。それより
も、つい目の前を走つてゐるハイウェイとその先に横る褐色の野を見てゐる方が、
どの位心慰められるし氣樂であるか知れない。無味乾燥な枯野ではあるが、時に
はカウボーイに追ひ立てられて移動して行く羊の群が現れたり、数え切れない雇
の大群を遊びに来るし、天氣の良い日には雪を被つたシヤスタが浮き出て望める。
百人近いクルーが貨車に鈴なりになつていつ迄もそんな光景を眺め続けてゐるの
である。平凡なものから何かを求めて止まない氣持は、口にこそ言はないが二年
の柵内生活に対する反撥を意味する氣がして淋しくなることがある。

穢さと激しさに於て先づ其の右に出るものはないコールクルーに、かうした自
然の風景がなかつたらう。やり切れないのであう。露天の職場なればこそ彼等の
疲労は半分も抹殺されて行く。仕事と云へば貨車からシヤブロー一本で横付けにさ
れたダンプトラックへ積込むだけである。勿論それは筋肉労働であるが労力の調整
さへ計ればさして苦痛なものではない。それよりも、もっと厄介なのは石炭の粉
末である。頭を越えてシヤブ口を投げ上げる時、雲母に似たキラ／＼光る粉末が
飛散する。それが皮膚に付いたら最後毛穴深く喰ひ込んで行く。二度や三度石炭
で洗つた位かではビクともしない。粉末に透過性があるのかどうかは知らないが、

一ヶ月二ヶ月と重ねて行く内に皮膚は黒味を帯びて全く違った人相になつて終ふ。完全ではないが其の豫防法として古い散水車へポンプを付け、日に幾回となく石炭へ水を打つて廻る。空の風の吹く日などは見て居る内に木柱^{ツラ}となり、石炭は凍つて終ふ。それでなくても足場の悪い貨車の上で足を取られたり、シヤブは立たなくなる。仕事をするとかう云へば余計の苦勞であるが、頭からが／＼する粉末を被るよりは遙かにましである。

ひと頃コールクルーには相當の特典が與へられてゐた。自動車で送迎されるし、食事二十時と一時の二回であつた。然し時勢と云ふのか送迎廃止、食事は十二時一回だけになつた。孰も自分で修繕せねばならない。附け加へて仕事場で焚火は羅りたらぬと云ふお達しまで受けた。仕事場の位置が高いので風は吹き晒してゐる。焚火によつて暖を取るより方法はない。今では僅かにドラムキヤンを引張つて来々小さな火を作り數十人がしがみ付いてゐる有様である。この所コールクルーは御難続きであつた。然し偉いと思ふ。時と場所を認識した人々は襟度をも高めて来た。彼等は黙つてなすだけの事はさち／＼と片附けて行くのである。

今迄とは違った人々を現実に見て、此處にも時の流れがあると思ふのである。

少くとも仕事と名のつく以上、それ／＼のかくれ苦勞が附纏ふのは當然である。石灰を手で掴むのさへ厭であつた人間が、一と度石灰に埋れて暮して見れば、習はいつか性となつてゐる。もう是以上汚れる余地のないまぐさでピカ／＼光る

ジャンパーを、着る人も、それを見る人も、別段何の感じも起らないのである。
自動車の送迎と食事を廃された當時は不自由にも思へたが、自然がこの問題を解
決してくれるのだから面白い。三月に入つて天氣は定つた様である。黒く細長い
病院の煙突に眞直な煙が、昇つて動かなくなれば、歩くのも亦樂しである。火を
焚くかわりに晝の休憩は思ひ思ひの場所に陣取つて晝寢が出来る。態々フレイト
カーの屋根に出張して羊を並べた様な景色のよい晝寢が流行り始めた。何處へ行
かうと、自然は吾等の味方であると思ふ感じが深い。

コルクールのシムボルであつた、目の前の枯野が、つみ二三日前人をつけて
焼かれてしまつた。人々は落膽したに違ひない。もう貨車に坐つて雨の方を眺め
る人もないのである。黒い地肌を出した焼野に青い芽が吹いてくるまでは、羊も
雁も姿を見せる事はあるまい。そう想へば此の白々しい埋立地が、かへつて胸を
つく思ふとなり、こよなく懐しく感ぜられるのである。

隨
筆

純な子供

河崎 重雄

其の日、私はお葬式に行きまして、疲れた足に下駄をかつかけて、裏の小野さんの家の花を見てゐました。私の教へ子の節子がやつて来て、「先生、リンカーンのピクチャー上げます。」と言って、四枚も持つて来てくれました。いつの日でありましたか、瞭然と記憶してゐませんが、いつか教室で、「先生はリンカーンが好きだ。」と言つた事がありました。それで節子は今日四枚も探して持つて来てくれたのでした。私は「有難う、節子さん先生の家に行きませう。」と言って私の家の方へ歩きました。ところが、節子は私のさう言ふのを待つてゐたらしい、一寸さにか「でも」と云つた様な顔をしたが、私の後に、恥かしさうにしてでもついて来るのであります。私一人部屋の角に寝てゐて、ガラんとした、塵埃臭い所へ節子は靴音をたてない様にと思つてか、ソロソロ這入つて来かけたが思ひ出した様に又外へ出て、今度は靴の裏をこすつてゐました。節子が這入つて来るのを待つてゐるのにさか／＼這入つて来ません。「節子さん、いゝのよ這入りなさい。」と言ふと直ぐ這入つて来ました。さうして、しまつてゐるドアを何回も何回もひっぱ

つて、又そこでしばうく立つてゐました。そして、ニコリすると「先生は一人で寝てゐますか。」と嬉しさうに尋ねるのであります。「ハイ、先生のルーム大きいでせう。」と答へると、「先生のフレンドは」と聞く。其の間に始終節子はニコくしてゐるのであります。「先生、シシマさん知つてゐますか・シシマさんは長いヒゲをはやしてゐます。あのシシマさんは先生がいい人だとお父さんに言つてゐました。お父さんも先生は神様だと言つてゐました。宮子さんも先生が一番好きだと言つてゐました。先生はホントにいいです。」先生はホントにいいです。は「私も先生好きです。」と言ふ宮子の言葉と同じ意味にとつて良かったと思ひました。右足をくたんと曲げて、左足をうんと前へ出して休めの姿でこれだけ節子は言ひました。「先生も、節子ちゃんも、宮子さんも、みんな大好きよ。」ハエにしかならない節子は、それだけしか言へない。天井を見上げた、そして右の方へぐるつと廻つて壁を見廻はして、もうなんにも言はないのであります。

私は、純な、楚々として思ふまゝ、感じるまゝ言ひ、動く、それでも先生の愛口を言つてはいけなないと云ふ頭をもつた子供が話するのを小鳥の歌を聞くが如くに感じて、私は口を入れないで、静かに聞いてゐたい氣持に際々なります。そのうち大抵の子供が恥かしくなつたりして困つて来る。「フ、フウーン」とあごを深くうづめ、私の顔を見て笑ひながら又天井を見上げたりする子供、ニコくして机の上の生徒の作品を一寸いちつて見たりして、私と互に見合つてゐるのをさける

様にする子供、いろ／＼に私の生徒三十五人は、私の前に性格を見せたりします。
 やがて節子が、「先生、わたくし十五の十四〇二にゐます。ブラザーが二人、
 シスターが五人。一番大きいシスターは病院に働いてゐて、わたくしはそのシス
 ターが一番きうみです。お母さんが、先生にサシミ食べさすと言つてゐましたか
 ら、先生來ます。」と息をころして待つてゐました。重大問題を出した顔で私の
 顔をざつと見つめてゐるのであります。その眼に力が罩つてゐました。「有難う
 行きますよ。」と答へると、「先生、サヤウナラ。」と丁寧な御辭儀をして、ドアの所
 迄走つて行つてゐました。私はそんなにして今節子が帰らうとは思つてゐません
 でしたし、驚きました。が、實に面白い、彼等子供等は歸りたかつたら歸る、御邪
 魔しまして、又來ますとか、そんな挨拶は子供等には分りません。教室を出る時
 にする様にもう一回ドアの所で御辭儀して、靜かに私の教へたまふに出で行く。
 私は一寸後から追つて送つてやりました。可愛い兩手をコートのポケットに入れて、
 小風に髪を斜に吹かせて、バスケットボールを運んでゐる子供等の横を歸つて行
 きました。私の見上げた其の時の、晴れた空に散つてゐる雲も美しい美しい雲で
 した。節子も宮子も、悦子も健児も、三十五人の生徒への愛情が慟々として、私
 の胸の中ぐにえ立つてゐたのであります。

私が「節子さん、リンカーンのピクチャー有難う。」と言つて鉛筆を二本差出す
 と、「イイノ」と言つてにげる。「でも、先生が上げる時は貰ひなさいね。」と言

ひますと、其の先生と云ふ言葉に「バイ」と出した手は兩手、賞品でも戴くかの様に、頭を下げて「先生アリガタウ。」と御禮を言ひました。あの小さい小さい手が頭から離れません。病院に働いてゐる節子の姉さんにも兄さんにも、お父さんにも母ちゃんにも會つて、節子の可愛く、そして良い子供である事を言つて見たくなりました。嬉しいのでした。一週間は燃えてゐないストーブはあの日、私を見つめてゐた筈です。屹度氣狂ひだ、と思つたことぞせう。大きな聲で、ワアーと喚いて見たかつたのです。くさめの出で来る程に、ワアーと喚き、喚くと誰か命令をする様なのであります。いや、つくりやくさめはどうしても我慢の出来るものでありません。私は其の時リンカーンを見ました。がいこつ見たいな顔にひげを生やして、どこまでも偉人の顔であります。「リンカーンよ、この私さどう思ふ。あんまり子供が訪ねて来てくれたと云つては嬉しいが、しばらく勉強も手につかぬ有様。あなたの若い時はどうでした。」リンカーンは、赤いピンに押されて黙つてゐます。「ね、私は眞面目なんですよ。然し、生れて死ぬ迄自分だけ眞面目に暮らすと云ふだけではなんだか不満足でしてね……」空には夕方の雲が西から赤黄色になつて、ドン／＼振がつて来ますし、寒さうに鴈が飛ぶのを止して、風に吹かれてたゞずんでゐます。私の部屋もだん／＼薄暗くなつて来ました。その時、「重雄君、先生を続け給へ。先生を。」とリンカーンは力強く私に言つてくれました。翌日、私は校長に先生を続ける決心を語りました。

詩壇

鉄柵

加川文一

たれにゆだねんゆめにしあらず
ひとひと日をおのれのものとはせよ
生くる日のあかしを身もて彫り
しばしもまたうまざる
そのいとなみのなかに
まことのおのれはあり
道をあやまたざりし日のところを
いま再びあたためよ
おのれの胸にいれよ

風すさぶ柵のなかにわれ日をかさね
柵のなかにやしなはるるもの
なげきをなせど

なげきはつかになげきにあらず
まことにわれはわがなげきをぞ生きん
大いなるたてかひの日の
火の粉うつれる瞳もて
今日をただしくは見ん

ああ立ちあがる埃のなか

けふも埃をあげて一人あるけば

塾校の窓よりながれくる

幼きものの唱歌は

灰色にひろがれる視野のなかに生きつ

われのひたすうにまもりてきし夢を

かなしき肉聲をもて流ふなり

★ 徴 兵

山城 正雄

ケヤスル・ロック山の向うは
今日も道赤に燃えてゐる
國民學校の子供たちが
長い影法師を失つたまま
習つた唱歌を高く歌つてゐる
鳴もゆつたりと飛んで
平和な隔離所の夕暮だ

不忠誠と言はれて
淋しく去つた彼の転任所で
來ないと思つてゐた彼の娘は
やつぱり見送りに來てくれた



風に吹かれて揺れる

緑色のバンダナの印象の濃さ！

彼の同じキヤンプに

帰國願ひのサインを求めて

人々はオフィスの前に押し寄せたといふ

明日を迎へんとして

アボロニ山の上は

今日も雲は高くじつと動かない

國民学校の夜学生が

グループになつて歩いて行く

憲兵の自動車もたつた一台ゆつくり走つて

平和な隔離所の夕暮だ





鮭

河合一夫

ぶすぶすと青黒い煙を部屋一ぱいにひろげて
三切れの塩鮭が焼けて行く
懐しい故郷の夕餉の包がふんと鼻を突く

魚好きの母が送ってくれた塩鮭の小包に

僕は一人では喜が切れず

このごろ親しくなつた小母さんに鮭の一部を切つて持つて行つた
小母さんの喜ぶ笑顔に満足して僕は歸つて来た

辛い塩鮭にお湯を混ぜて

僕たちは語り合ひながら箸を取つた

「おいしいね」

「皮がおいしいね」

「僕もお母さんが欲しいな」

親のない友がしみ／＼言つた

「僕の母はよく辯當のお菜に塩鮭をいれてくれたつけ」
他の友が口をさぐ／＼させながら言つた。

「ママに蟹を送つてやうかしら」

「常談ぢやないよ。ポストンのやうな暑いところへ送れるもんか。
途中で腐つてしまふよ」

僕の心は今晚なせこんなにはか／＼と暑いのだらう

思慕

野澤 裏二

戀は語るべきもの

愛は告、白ぐべきものにあれど

いまだいとけなき乙女子に

吾れ告、白ぐべき言葉を知らず

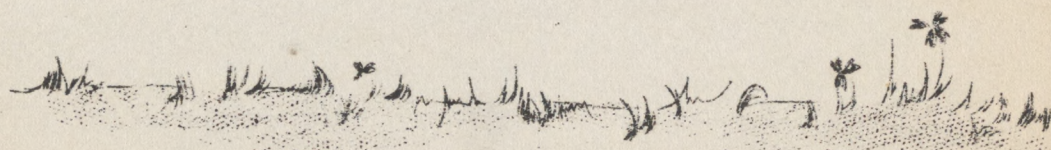
君が桃色^{あか}き唇よりこぼれ落つる言葉

君が凝視^みつめしエンゼルに似て

汚れなき瞳

吾が情熱^{こころ}とらへてはなさじ

虚偽^{いつはり}の戀なれば



忘れ得べきもの
されど吾が情^{こころ}日に昂^{あがり}りて
君が幻想を描けり

深く刻み込まれたる
君が名^な前^{まへ}を諦^{あきら}め得ぬ苦しみに
今日もまた吾が惱^{なや}みはつきぬ
惱^{なや}むや明日もまたかく

あゝいとけなき乙女子よ
美しきエンゼルよ
如何にして吾が苦惱^{くるなや}しき情熱^{こころ}を
君につたふべきか
吾れその術^{すべ}を知らず



高原短歌會本部歌會草鈔

現身を音のみに縋る音子めしなごと思ひて見聞けば目頭まかしううるむ（講堂ニモの夕にモ）

入江 ちえ子

仄暗く部屋にとまれる蠟燭の蠟ながせるを近寄りて見し

加川 又一

明け方の天あめを啼きつつ渡る雁光かりかりにこそ顯たてその一つひとつ

矢尾 嘉夫

陽は未だ射さぬ枯草ふ生霜白し野雲雀のこゝろふ牙えざえ徴る

綾織 謙介

盗みせるは人の子なりと騒げどもわが同胞みどりの一人なりけり

村上 正男

七つ八つ石を置き並なめて庭造り假の住居に心足うへり

山内 曾六



ずつしりとわが傍らに腰据ゑし女の重量感に氣壓されてゐる

豊福 昌範

店々のカタログ繰りて餘念なき姪れる妻を見れば愛しも

中馬 速男

日並べてキャンブの隈ぐまたぐぬれど良き職ありと人の言はなくに

橋本 京詩

荒みたる吾の命をいとしみて春陽明るき巷に出でたり

宮村 一雄

國思ふ心制へて住めるとき届きし慰問の品は身に沁む

吉松 博志

世界の男の子あまたいくさに死ぬ思へば一日ひと日を尊みわが生く

桐田 しづ

依る國を異にして後とり交はす便りはうつろのものとなりゆく

仁熊 登美子

暮れぐれに一羽の雁の飛びゆくを見送りをりて寂しくなりぬ

村上 かつみ

鉄柵に赤ひくとされる電燈はなづかふ露筋に光仄かなり

渡辺 あい子



常ならぬきに流浪ひつぎてゆく同胞う永久の住家をいづくに求むる
岩本志満子

將末は測り難けれ新しくひうけゆくべき國とぞ恃む
上村比呂子

勝敗のこの際にして一個人の立場に拘泥はるものさびしさ
治良彦

紅葉賦並に吹雪

ユタ北辺にありける折々の歌

治良彦

黄に紅におのもおのもの色映りて幾山褰にわたりもみぢす

常緑樹の間にむらむらと紅葉映る山のなごへに夕陽はまともなり

岩山のこぼしき地肌に附く如してたけ低き紅葉とびとびに見ゆ

地につく如し紅葉つらなる向つ山きのふ降りし雪の白斑見えつつ

常緑樹ももみぢも白くなりし山に断崖赭く雪をとどめず



もみぢ葉の散りのまがひにふぶく雪いたもみだれてわが目をさばふ

渦巻きて野もおぼろなる天つ吹雪その樹群に亂るあざやけし

横ざまにふぶきくる雪物事し大樹の幹に吹きつけ吹きつけ

吹雪

森本 田鶴子

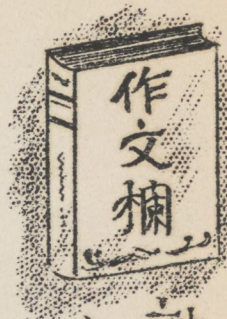
此の土地になれし童か球なげて喜々とし遊ぶ砂煙のなかを

白雪は渦巻く風に舞ひ散りて家蔭みるまにうづ高く積む

朝より狂ふ吹雪のあやに美し仕事を置きしはし見あかぬ

吹き溜り膝を没する家蔭の雪に踏み入り子等うつゝなし

午後しばし落ちるし風は夕まけて吹きつのはたり砂煙上げつゝ



詩二篇

中等科

市場美志恵

学校のひと時

学校の窓から見る

春の空は白いよ

遠い故郷の友達は

今頃どうしてゐるんだろう

青い目の先生は

日本語を知らない

二世だつて

私は一人ぼつちなのだ

がっつと見る高い空は

何時も淋しいよ

故里

故里は

我が心の

まなざしに
學校に小川に山に

幼き姿にて

たゞずめる

遠き村なり

思ひ出の村なり

故里は 故里は

故里は

永遠に

今は歸らぬ

一つの村なり

昔のまゝにて

なつかしき村なり

春が来て

中等科

上田静子

庭先に名も知れない花が咲いてゐる。もう春だ。あんなつかしい故郷、その土地で生れ、ここに來るまでそこに育つたスタクトンの春を私は想ひ出す。

直ぐその山の向ふには早や春風が吹いてゐる。あのうちの前の廣い原つばには名の知らない黄色い草花が一面に咲き出したことであらう。あの花が咲き出すと、私は一ぺんに春が來た喜びに胸をはづませるのだつた。その中にころげ廻つて遊んだこともある。日本式に作られてゐた廣い庭にも色々な花が咲いて美しいことであらう。私は南向の暖いルームを貰つてゐたが窓の直ぐ下のあの美しい眞白い梅の花も咲いたであらう。暖い春の日の差込んだ明るいルームにはそのよい香を運んでくれた梅の花。

「東風吹かば香おこせよ梅の花、主なしとて春を忘るな。」

ふとこの間、父に教はつたこの藤原道實の歌を思ひ出した。

直ぐと又この家に歸つて來られると思つて何と彼もそのまゝにして置いた私のルームには、私の一番愛してゐた日本からの土産に戴いた二尺餘りの高さの日本人形がガラスの箱の中で淋しく私の歸るのを待つてゐるであらう。何時まで待たされるのか、再び歸れそうにもない故郷。私はいづれ日本に歸るであらうけれど、せめてもの御恩になつたアメリカに私の最後は殘す形見としてあの部屋にそつとあのまゝ置いて行かう。楽しい思ひ出ばかりのスタクトンは私のすべての幸福を包んだつかしい故郷である。

再びこゝにも春がめぐつて來たけれども、今まで外にあつた様を樂しさは來ない様な氣がする。

近寄る春

中等科

中村 愛子

春のしるしも次第に当地にまで近寄つて来ました。飛び石を飛んで来るかのやうに、一ぱく／＼と楽しい春は進んで来るのです。日は次第に長くなつて行きます。近頃は冷たい日などが続くと思つてゐると、急に又暖かき日和に變つたりして少しもあてにはなりません。でも此の變化を受ける度毎に春を呼寄せることが出来ると思へば、安心して待つことが出来ます。

今日は非常に暖かき日和で春の空氣を全身に感じます。一年に二度と回つて来ない此の春を一時でも早く誇ひたいのです。今日のやうな日に浮ぶ思ひ出は、キヤンプに入る以前に楽しんだ春の日の楽しみです。忘れ難いことは、毎週日曜日に花見に行つた事です。咲きつくした櫻は暖かい春の日光に照らしつけられ、さゝやかな風にゆられてゐるあの光景を想ひ出します。

春とはまだ暫く會へるにありません。準備に暇がかゝつてゐるのかは分らないが、毎日待たれる春は何をしてゐるのでせう。今年の春は一そう皆に楽しい幸福を與へようと思つて支度に暇取つてゐるのでせう。

母

六年生

秦 正枝

お母さん、一緒に楽しく暮すこともわづか十数年あまりでしたが、どうして其の月日を忘れませうか。もう一度胸にすがつて「ママ」と呼んで見たいな。あの美しい笑顔をせめてもう一度見たいな。何時も弟等とけんくねしてよく叱られたものですが、今になつて見ますと其の時が一番よい時でした。明けても暮れても、朝から晩まで口ぐせのやうに「ママ、ママ」で暮して来たのでした。もう、叱る聲はめる聲、又は注意をして下さる聲が聞えなくなつた時には母は既に此の世にはゐなかつた。ただ思ひ出の中に残るだけであつた。孝行をしませうと思つても、もうおそかつた。

母は突然病氣になつたので、私は實に始めて母といふ有難い人を知つたのです。それまでは御嬢さん生活をしてゐましたが病氣の爲別れて生活をしなければならなかつた。母は本當につうかつたでせうが、私は母がはりの役目を買はされました。今ではどうして生きて来たのかと思ひます。毎日々々「ママがゐたらう、ママがゐたらう」と淋しい日を送つてゐました。別れて生活すること四年間、私が十五の時とろ／＼とく／＼なつてしまひました。今では御佛の國から私共をきつと守つてゐて下さるのだと信じます。

私共兄弟四人は父や皆々様のおかげで一人前の人となりました。母が生きゐたら本當に喜んで下さることと思ひます。母に一日も安心させずに先立つて行かれた私は本當になさけないのです。これも運命だと思つてあきらめてゐます。度夢の中で母の美しい顔を見ることもあります。本當にこれより嬉しいことはありません。きつと母は私のそばに何時もいらつしやるのだと思ひます。あの美しい笑顔を心に抱いて私は將來の道を踏んで行きます。



七

人

集

薄雲の地を這ひのぼる春野かな
佛参の媼にはでやか春日傘

まはしつゝ草に座りぬ春日傘
春の野に摘草ならで採る貝

春日傘の上には遠けくシヤスタ山
春の野の電柱にもたれ羊守

そのかみの湖の名残を春野かな
吾娘に似し後ろ姿や春日傘

春の野に貝堀る娘等に歌ひ聲
呼びとめて人遠くなる春日傘

岩下 蘇村

矢野 紫音女

保田 山晴風

森山 一空

田中 素風



春の野やかきめのたむろそちこちに
春日傘ちうほう見えてキヤンブ村

今村 桃村

摘草や兒はすや／＼と乳母車
摘草や仰く碧空飛機斜め

池 永 肥 村

雪

解

水

中 口 飛 朗 子

雪解氷越さぬ石の上雪凍まり
又書ける頃のいもうとかままつり
かきくまる湖やうすらひ波に乗り
牛のどか鳴きつつバスの路をふさぐ
常夜燈ひとつひとつの朧かな

創作



書き下し

長篇小説

時代

第一章

樋江井 良二

河村は、彼や、彼の母親を十幾年前、彼の生れた當時知つてゐたといふ人に逢ひ、「お母さんと一緒に住まひですか」といふ向ひに、「いゝえ、母は、他のキャンプに居ます」との彼の答へに、その人は、彼の父がもうずっと以前に亡くなった事を知つてゐ、母一人、子一人の母子が別々に住むのを怪訝さうにしてゐるのを見て、彼は、「色々都合があつて、一緒に来られなかつたのですが、追つてこちらへ来ることになつてゐます」と苦しい言ひ訳をするのだった。かうした質問が出る度に、「母はあとから来ます」と後を濁して返答して置くのだったが、実はかう／＼なのです、といちいち、あまりよくも知らない人たちに家庭の内情を

語るのは馬鹿げてゐるし、かうした向ひをする人たちは、母が財産の整理か、何かの都合で彼と一緒に来られなかつたんだうと承知して、それ以上に尋ねやうとする人も別になかつた。母の方でも、きつと、「息子さんは何處に居うつしやいますか」との、人の問ひに、「あれは先にツールレーキへ行きました。私も追つてあちらへ行くことになつてゐます」と、かうしたふうに、その人に言ふ訳をしてゐるのではないかと、河村は推察するのだった。

彼が不忠誠組と決り、愈々このキヤンプに転任しなければならぬことが明白になり、彼の唯一の家族である母親が、彼と一緒に此處へ来るかどうかの、當局からの向合せに母はかねて覺悟はしてゐたものの、切端詰まつた現実の問題になつてみると、どうしたらいいものかと非常に迷つて色々と困惑するのだった。正式に結婚してゐない爲に、同様してゐるとはいへ山野は彼の家族にはならず、一世である山野には忠誠組も不忠誠組も無く、それに日本へ歸る意志も當分ないとすれば、母には、息子の和美に隨いて転任して行くか、山野と一緒に踏み止まるかの二つに一つしか道はなく、母の苦しい立場も彼にはよく理解されるのだった。正式に結婚してゐないとはいへ、十年間同様してゐた母たちであつてみれば、夫婦と別に愛りはなく、それに結婚してゐない以上別れることは離婚の手続きというまいし、わけないやうに思はれるが、母にしてみれば一身上の大きな問題であつたし、男女の愛情、男への義理、そうした母自身割切れない複雑な感情で、山野

と別れて生活することは悲愴な問題であり、といつて、二十文を越したばかりの和美を一人旅立たせる親の氣持も、それにも増して深刻なものだったと思はれるのだつた。山野も和美も、母に、かうしたらいいだらう、あゝすべきだとか、直接に一言も言はなかつたし、和美はたゞ、「あなたの好きなやうにしなさい」と消極的な言葉で、母に自由な選擇を要求してゐたし、それだけに母には一層切実な苦しさだつたにちがひない。母は差迫つた日にちを前に一人煩悶するのだつたが、一人では解決出来得ず、友達の面を、どうしたらいいものだらうか、と駆けずり廻つて相談して歩くのだつた。和美の友達であり、と同時に母の友達である朱美さんに和美は、「母も困つてゐるやうですが、いま僕と一緒に輕任するとしても、山野の事が氣にかゝり、一生悩むことでせうし、それに僕と一緒に此處を立たせてしまへばそれつきりになるんだから、母に踏み留まるやうにしたうどうかと傳へてくれませんか。僕はそれが一番いい方法だと思ふんです。」と語つて、母に彼の氣持を傳へてゐるのだつた。母も、直接和美には言はなかつたが、そうした風うしかつた。多くの歸米青年が歩んで来た親子の鬭争を、過去五年間、色々な形をとつて踏んで生活して来た彼等母子が、キャンプへ入つてからはめつきり親しみを感じ合ふやうになつたのではあつたが、和美には家庭を離れて一人ぼっちになる淋しさより、一日も早くこのブラックかう、ブラックの人々から離れて行きたい内

面的な煩悶を持つてゐた彼には、一人で新しい生活に入つて行く樂しみを思ふ方が強く、洗濯を自分でしなければならぬと思ふといやだつたが、それを別に苦になる問題でもないし、それにアイロンは朱美さんに頼めばいいし、知らない人ばかりの独身部屋にいれられる心配もない事を思ふと、内心母が彼に従いて一緒に転住するのを恐れる心持も感ずるのだった。

當局へ最後の解答を二人で行むに行く途中母は

「やっぱり私はお前と一緒に行かう。」

とつぶやくやうに言ふのだった。和美には、母が彼への言訳のやうに聞き取れ、最後の日になつてもまだはつきり返事の出来ない母がじれつたところもあり、また不憫でしやうがなかつた。脊中にじつくり汗を感じる暑い日中、二人とも色々な話し合ひたい感情を秘めてはゐるが、何も言ふ事は出来なかつた。

「ママ、どうするんです。」

と、事務所の玄関まで来て、和美は幾分強い語氣で母に話しかけた。

「やっぱり私は行かないことにしやう。お前のところへはあとからいつでも行かれるんだから。」

母のおど／＼と奮へた聲に、和美は残酷を聞きかたをしたものだと思ひ、心に恥じるのだった。

「それがいいでせう。ママと別れるのはいいやですが僕ももう一人前ですし、それ

にあなたもあとから何時でも来られるでせうから」

と、内心母の答へを豫期してゐた彼は空虚な氣持を壓へて母に言ふのだった。

母は和美的爲めに、こつ／＼溜めた月給の全部を費して、オーダーブックを見ても冬の着物、シーツ、目覺時計と、S子さんや朱美さんに相談しては買ひ求め、スーツケースに詰めこむのに忙しかつた。忘れっぽい、なんでも直ぐ失くして仕舞ふ、だらしない和美的ために、母はシーツや手拭などには糸で彼の名前をいち／＼縫ひこむのだった。和美的母がどんなものをスーツケースにいれてゐるのか見もしなかつたし、又手傳ひもしなかつた。

転任する一週間ばかり前から、和美的死んど家に居たことはなく、S子さんの家に居びたりで、カードを遊んだり、レコードを聞いたりして、夜の十二時を過ぎて家に歸つて来るのだった。ある晩など母が、ぼつねんと電燈のない部屋で椅子に坐つて煙草を喫つてゐるのを発見して驚いた事があつた。彼は一言も言はず、だまつて床に付くのだった。じつと動かないで坐りつゞけてゐる母を身近に感じてなかく／＼寝つかれないのだった。

母は毎晩十時頃に熱いコーヒを沸してS子さんの家へ運んで来るのだった。

S子さんが一緒に飲みなさいと勧めても、母は、「あたしはもう飲んだから」といつて、淋しく一人で歸つて行くのだった。一晚なりと母と一緒に居てやううと思つてもみたが家にちつとしてはゐられない彼だった。

こんな事であつた。一日掛りでフレッツの荷作りが済んで、夕方和美は子どもと散歩に出た。薄暗くなつて彼は歸つて来た。家の前に母が立つてゐた。彼を見るやいなや、母は

「いままで何處をうろくしてゐたんです。何ですか後片付けもしないで、荷作りが済んだらちやんと後片付けぐらいしておきなさい。金槌や針は、借りたら借りたで返しもしないで。フレッツを路の真中にはつちらかしておいて、通り路もなく、みんなが迷惑するぢやありませんか。だらしない。」

怒氣を含んだ強い聲であつた。彼はかつとした。一言二言母に悪言をあびせて、夢中で逃げ出した。ブラッ内をぐる／＼廻つて氣持を落着けた。S子さんが一人で後片付けをしてゐるのだった。家の前に戻つて来た彼の心は平常になつてゐた。母の怒るのも無理はないと思つた。そしてほ／＼と淋しい氣持で彼はS子さんと一緒に後片付けをするのだった。

何時か洗濯場で、ぼと／＼と涙を流しながら、和美の着物を洗つてゐる母をS子さんが見て、和美に、

「和ちゃんはあるまいとお母さんをもつて。」と泣いて彼に話すのだったが、彼は別に悲しいとは思はないのだった。今から思ふと不思議な彼の落着き方だった。ブランクで送別会のある前日、母は和美に、「送別の辞の原稿を書いてあげやう」といつく机に向つて一生懸命に辞書を見ては原稿を作るのだった。「さあ、出来

たから読んでみなさい。」といって、便箋に三四枚の原稿を彼に渡すのだった。きまりきった平凡な挨拶の文章がくどくどと書かれてあつた。「こんなもの話せるもんか」と彼はそれを母につき返した。「まあさう言はないで。私が一べん読んでみるから。」といって、母は読み出した。和美は寝ころんで、聞くともなしに苦い顔をして聞いてゐた。読んで行く母の聲はだん／＼と奮へてくるのだった。彼はびつくりして母を見た。眼鏡の奥の母の眼はぎろ／＼涙で光つてゐた。たまうなくなつて、彼は夢中で家を飛び出したのだった。

送別会も済み、別れの挨拶も済み、離別の淋しい雰圍氣を包んで、和美ら不忠誠組は速しくブラクを去つて行くのだった。彼のスーツケースとマンドリンケースを抱へて、母は彼の後からちよ／＼とついて来るのだった。母も和美も泣いてはゐなかつた。寢不足の母の蒼白い顔は一層老けて見えた。

「あちうへいったら直ぐ、餞別を戴いた方々にお礼狀を出すのですよ。」と彼のコートの襟を直しながら母は言ふのだった。和美はツラクに乗った。荷物で一杯で身動きも出来ない程だった。

「河村君万々」

ブラクの人々が叫んだ。

「元氣でね。」「手紙を呉れ給へ。」「あとのことは心配するな。」

人々は別れの言葉を送った。

「和ちゃん、和ちゃん」

後の方で彼を呼ぶ聲がした。振向くとS子さんが立つてゐた。

「お母さんが、和ちゃんの手を」

彼女は言った。母が右手を差し出してゐた。辱しいのと、てれくさいのとで彼はもぢくしてゐた。母は和美の手を求めてゐるのだつた。和美はたゞ軽く右手を揚げてそれに答へただけだつた。ツラクは動き出した。次第に小さくなつて行く人々の姿、母の顔と高く振り上げられた手。

鉄柵

原稿

募集

一、創作・隨筆・詩其の他。

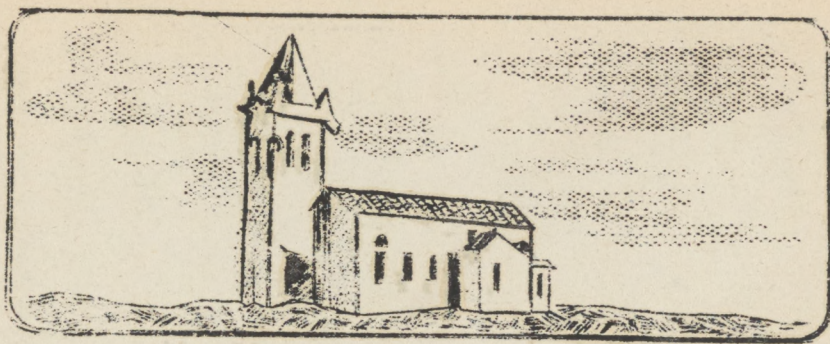
一、紙数に制限なし。但し短きもの歓迎。(月紙は三十六字詰十八行)

一、作品の取捨は編輯者に一任。

一、原稿は一切返還せず。

一、住所氏名明記の事。

一、宛名は一〇。一B「鉄柵社」編輯部。



父も引っぱられた

谷崎不二夫

シネホールの洗業は戦争が始まってからも続けられ、
両端をロープで吊った長い板の上に乗リ、危げに働く
人夫達の手で汚れた埃が流ひ落され、今では塔の上層部
は真白くなり、青天に聳えてゐる。その廻りの樹木は若
芽を出し始め、澄み切った大氣の中で風に吹かれてゆる
やかに動いてゐる。周囲は何となく湿き／＼した氣候と
なつてゐるが、威勢の良い新聞賣りの呼び聲や、酒場か
ら流れ出てくるラヂオのニュースは、日本人の顔をしてゐ
る健次には聞き苦しいもので、それらの物の背後に潜む
大きな力に押しつけられる様な氣がして、暗れ／＼とし
た氣分になることが出来なかつた。

ジュニアハイは通つてゐる健次は、行き歸りに、フィルム

ン街を通るのが恐しく、フリッピンがぶうくしたり、店の前に佇んだり、ある處を通ることは不氣味で、何時も本の束を小脇に抱え足早に通り過ぎた。

此處を過ぎると直ぐ日本人街である。日本人街の店は日毎に閉められ、通行人日本人は皆忙しそうで、どの人の顔を見ても暗い表情をしてゐた。

サイドウォークには色々な家財道具が持ち出され、彼處此處に猶太人が大聲で取引をやつてゐた。ダウの太った腹を見るのが何となく嫌であつた。

肉店安売りと済んだアジアの前には紙屑が、やたらに散つてゐて、店の中はうす暗く、埃がのぞいてゐた。シヨワインドの中は空で、その前には三四人集つて

貼紙を読んでゐた。貼紙には日本語で書いてあつた。

一人のオールドメンは聲を立て、読んで、横の地図を見てゐたが、

“此の辺は未だだ、何時になるかなあー”と呟いた。

“行く處へ行くさ”隣りの男が吐き捨てる様に答へた。もう一人のひよる高

い男は、

“何も急いで行かなくても、どうせろくな處ではないかう、一日でも永く娑婆に居つた方がえー。ハハハア”と笑つて火の付いてないパイプを銜へた。皆笑つた。

今日も新しい立退区域が発表されたりしく、地図の上の赤い鉛筆の線が又振がつてゐた。

健次は家に帰り着いた。扉を開けると中は雜然としてゐた。家財道具も残り少なく、カーペットさへ剥いで売ってしまったであつた。家には誰かゐないやうにひっそりとしてゐて、最後に残つた電気ストーヴの古物や、毀れたラヂオ等が寂しく片隅によせてある。父は夜になつても箱を造つて大事なものや片づけなう。何時立退かされてよいやうに、と言つて始末をしてゐたので、パトラには半分出まかけた箱板切ハンマー・サン針箱等と一緒にごちや／＼してゐた。不細工に出まてゐる箱の一つに腰かけてゐると、何だか空恐しいものが次第に目の前に迫つて来るやうであつた。

折から二階で電話で話してゐるたかぶつた母の聲が聞えた。「はい、今朝十時頃F.B.Iが来て……。い、え、もうかねてから覺悟して用意してゐましたので」と聞えた。健次は、父を引っぱられたな」と突作に感附いて、ギクリとして立ち上つた。が、又坐つてしまった。夕飯時等によく父は、今にお父さんを連れにくるよ」と、笑談半分に語る時の顔があり／＼と浮んで来た。母はスーツケースに手廻品をつめて何時でも出づかず出て行けるやうに用意してゐた。そのスーツケースをさげて、小さな父は丈の高い白人達に取り巻かれて行つたときの光景を想像してみると、今迄、出口を求めて溢れてゐた涙が、はう／＼と落ちた。唯今ア」と姉が歸つて来た。健次は慌てゝ立ち上つて涙を拭いた。姉は素早く健次を見て、「何うしたの。ケン何泣くの？」と聞いてゐるところへ母が下りて

來た。母は眞剣な顔してやゝ蒼ざめてみえたが、二人をみつめたまゝ、何も言はずに、姉が何か言ふと同時に泣き出してしまつた。

それから、親しい白人に頼んで、父の居所がやつと分つたのは一週間してからであつた。早速逢ふに出かけることになつた。三十哩ばかり離れた、C.C.C.のキヤンプに居ると云ふので、近所の他人に頼んで家のカーをドライブしてもらつて出かけた。このカーもペイメントが済んでいなくて、何時會社からとりにくるか分らないが丁度よく今日迄あつてよかつたね」と母が言つて聞かせた。皆んな思ひ／＼に父の生活してゐる様子を想像しては語り合つた。酷い目に逢つてゐるか否知れない」と健次はひそかに思つてゐたが口には出さなかつた。暫くして、姉が言ふと、母は豫期してゐたやうに、そんなことを考へるのはお止しなさい静子と云つて窓外を向いてしまつた。郊外は晴れ晴れした小春日和で、ピクニックに行くのなう何んばか楽しいだらうに」と母が呟くやうに言つた。健次はもうピクニックのシーズンもやつて來たが自分達日本人はそんな楽しいものとは随分縁遠くなつてしまつたとぼんやり考へた。

途は山の中へ折れて、直ぐ、面會人が山徑列をなしてゐる處に着いた。谷間のキヤンプであつた。鐵の繩に張り遶られてゐた。面會をする人もその金網の外から話してゐた。済んで歸つてくる人々が赤く泣きはうした目を拭き／＼やつてく

るのを見て、悲壯な空氣がみなぎつてゐると先づ感ぜさせられた。お母さん、泣かないやうにしませう」と姉は母にそつと囁いた。

思つたより早く自分達の名前は呼ばれた。母と姉の後にくつついて金網の方へ歩いて行つたが、父の姿は見當らなかつた。誰かが父の名を呼んでゐた。向まなく父はやつて来た。きよろ／＼こつちを見廻して自分達をみつけると、前の人を押し分け、綱にぶつつかるやうにして立つた。母は話し出した。姉はハンカチ布で顔を蔽つてしまつた。横合から看視人が英語で話せ」とさえぎつた。オーライ」と父が看視人の顔を見上げたま時始めて父の蒼白な頬と落ち窪んだ目を見た。母は用意の紙切を見ながら、日本語を話す向々に、アンドとかバットとかを入れて英語のやうに聞えるやうに苦心し乍らどん／＼用件を告げた。二分間は短くすぐ過ちそうであつたが、大切なことは言交された。今度は姉が、口早やに「着物やなんかを持つて来ました。検査してからお父さんに渡すさうです。」と言つた。健次も何か言ひたかつたが、何を言つていゝか分らなかつた。父は「健次勉強するんだよ」とだけ言つた。健次はうなづいた。頬が固張つて微笑むことも出来なかつた。するとすぐ看視人が向に入つた。父は何も心配するなと言つた。姉は咽び泣いてゐた。待つてゐる人が皆んな向くので健次は泣きたいのを我慢した。カーの方に歩き乍ら、キャンブを振り返ると父らしい人がこつちを向いて帽子を振つてゐた。涙にぼやけてはつきり分らなかつたが、三人とも手を振つた。皆の足

は重かった。カーに乗るとは、移動して見たがそこにはもうそれうーい人も見え
ず、金網だけが白く日光を反射してゐた。



転住所

山城 正雄

グラナダに移つて来ると、転住所と假收容所の雰囲気
も内容もすっかり異つてゐるのを、邦男は感じるのだつ
た。假收容所に入れられた時は、戦争に追はれて来た郷
土や哀愁や、政府の處置に対する壓迫された反抗的な潜
在意識や、民族特有の燃えた感情で、人々は戦争の暗い
影を追つて生きてゐた。本當の自分の家を持たない、不
自由な共同生活から来る不平や不満が、何時もキャンプ
に充ちてゐた。今後はどうなるか判らない。何處かに移
される風説もあるが、心の何處かにそれを否定しようと
言ふ希望があり、このまま置いてくれるのではないのか
と、心の中で袂かに信じてゐた。鄰近所が知り合ふよう
になると、お互ひの戦争前の生活の話や、家財道具を無

料と同じ値で安く賣り飛ばして来た話や、愛犬と別れて来た悲しい話などするのだった。慰めて上げたい氣も湧いて来る。日本人の境遇や氣持や諦めを表現して、何時の向にか^{サード}○○○^{ケイス}○○○といふ言葉がキャンプ中に流行つてゐた。邦男もよくそれを言った。彼がそれを口にするようになった時には、同情や慰藉から生れたこの言葉も、幾分か自嘲と諷刺さへも含んで、眞面目な話をも軽く茶化してしまふのだった。

最後のグループと一緒に、邦男がグラナダのキャンプに移されたのは九月だった。汽車の窓から見ると、キャンプは岡の上であり、三方は半沙漠の草原に圍まれ、生氣を失つた草原はうね／＼と地平線まで続いてゐる。下り坂になつた此方には畑があり、收穫を済ました後は青々とした草が生えてゐる。自分達が下車したグラナダの町は、キャンプから一哩半の處にあり、煤けた廢家や荒れた店のあつた人の小さな田舎町であつた。丘上のキャンプから受ける壓迫を意識してゐたのか、町の煙突は控へ目に煙を吐いてゐた。

先に来た人々は部屋らしい部屋を造る爲に、大工や細工に忙しうに働いてゐた。彼等はよく^{ネッアー}○○○^{スケー}○○○と言ふ言葉を口にしてゐた。何處かの食堂^{メス}で、ウエトレスが誤つて皿を落して破り、それを慰さめる爲に、同僚の一人が言つた言葉であつたに違ひないが、転任して来た人々の感情をよく表はしたこの寸哲的な言葉は、もうキャンブ中に廣がつてゐた。テーブルや椅子を造る爲に板が欲しい。

道德的には板を取つて来ては良くないと思つてゐても、生活する爲には、やはり板は必要だった。人々はネバ、スケヤと言つては、心の蟠りを吹き飛ばして、板を取りに行くのだつた。

戦争のニュースやそれに伴つて来るデマや、ごた／＼として落ちつかない気分が暮して来た假收容所時代と比べると、幾分か過去や環境を批判するだけの餘裕が湧くのだった。大衆はお互ひに「黄色い犬」とか、殴り込みとかで、同じ感情を継続してゐても、一部の人々は、「転任」と言ふ言葉の持つ意味を知つてゐたし、人々の上に超然としてゐて、転任局の政策の歩が、自分達の上に刻々と押し掛けて来るのも意識してゐた。加州から遠ざかつた爲に、戦争から遠ざかつたやうな氣がする。戦争と生活は別問題のやうな氣がする。將來の生活を思ふと、転住するに良い場所や職業の到来を待つ、生活の苦しみを味はつた人々澤山ゐた。大衆の流れて行く單純な感情や、生活から生れて来る複雑な理性を考へると、自分はこのまゝで良いのだらうかと、邦男も考へるのだった。その後から同じ内容を持つた「ネバスケヤ」を口にするのだった。

邦男はキャンブの周圍を歩いて見た。草原の中に五、六人の蛇捕りがゐた。それを見ると、未だ鉄柵の張られてゐなかつたキャンブの外を、彼も歩いて見たくなつた。野草の上に陽炎が萌えてゐる。時々野兔がふいに飛び出して来る。土を嗅いでゐた犬が、本能と優越を尻尾に表はして後を追っかける。犬の名を呼ぶな

ら少年がその後から駈け出す。鈴蛇の尻尾を踏みつけはしないだらうかと、不安を懷いて、キャンブの外れに立つてゐる人々は少年の後姿を見送つてゐた。一部の大人の初期の流行は、雨降りの時の用意に買つて来た長靴^{ブーツ}を穿いて、手に棒切を持ち、草原の中に冒険を試みることにだつた。邦男はこの得体の知れぬ草原に入る氣にはなれなかつた。最初はよく注意して歩いてゐても、何時の間にか思索してしまふ自分のぼんやり、鈴蛇が好意にいくら鈴を振つてくれても、自分にはその好意を受けるだけの親切さもないし、沙漠の枯れてしまつた草の花粉が、鼻から入つて来て肺臓まで乾燥してしまひさうな危惧の念さへあつた。人間の体臭を恐れて、毒蛇や泥亀や野兎は、キャンブから遠ざかつて行くことも、蛇の多い地方で育つた彼はよく知つてゐたが、自分達の住家に、最大強敵の人間が移り住んで来たにせよ、故郷を捨て、三角形の首をきよろつかせた蛇が、時々キャンブの中に戻つて来るやうな氣をするのだつた。

邦男は家に沿つてキャンブの外れを少し歩いた。流行歌が聞える。コロラドの秋の空は濁つたやうな灰色の中に埃を孕んでゐる。邦男の足は自然と家の方へ向いた。流行歌は懶げに聞えるだけだ。キャンブはしーんとしてゐる。しーんとしたキャンブの午后、秋は埃を孕んでゐた。途中、板を擔いだ人と逢ふと、自分も板を持つて歸らうと考へた。がらんとした家には、自分と友人の健一の寢台^{カット}が二つあるだけで、クロゼットやテーブルや椅子が欲しいと思つてゐた。是非造らうと

も考へてゐた。板を擔いでゐる人は、板を「盗んだ」のではなく、「拾つて来た」と言ふ足取りで、ゆったりと土埃を敲いて歩いてゐた。

板は未だバラックの建てられてゐない、バラックを建てるかどうか判らない處に積まれてあり、兵隊が一人監視に立つてゐた。肩にぶら下げてゐる銃には鉄の持たさばあつても、この兵隊の表情の何處かにうすのろなところがあつた。ガムを噛みながら、觀念を否定した表情だつた。板を取りに来た人々が、長い板を手にする時、彼は「取つてはいけな」と制止してゐたが、一度家を建てる時に「突張り」に使用されて、所々に釘の附いてゐる板を默認するのだつた。邦男は板の周圍をぐるつと歩いて見た。セメントの附着した板もある。汚れた板もある。が、やはり新しい板が良いと思つた。新しい板も澤山積まれてゐた。積まれた板の間から草が覗いてゐる。鈴蛇がこの草の中からつそりと這ひ出して来るのではないのかと、根元に落ちてゐる枯葉の下まで彼は意識して見るのだつた。ふと兵隊を見ると、兵隊は横向きになつて二世の娘と美語で何か話してゐる。娘のリボンが風に揺れて赤い。靴下も赤い。邦男は兵隊が見てゐないので、長い、平たい板を二枚肩にすると、後方を振り返つてはいけなと、心にダメを押して歩き出した。あたりに斜して鉄砲が鳴つたら、銃口はきつと自分に向けられてゐるに違ひない。脊中にぞくぞくとする畏れを意識して、邦男は歩くのだつた。一米國の兵隊と二世の娘！何か話してゐる。一長さ二寸の靴下の印象が赤い。擔いだ板の長い兩

端が空中にぶり／＼と振動する。肩に食ふ込んで痛い。重い。埃が吹いて来た。

途中、邦男は板を下してブラックの横で埃を避けた。板の山も監視兵ともう見え
ない。吹かれてばさ／＼になった髪から、埃は汗ばんだ肌を乾かして落ちて行く。
パンツと皮膚との間に空氣の重みが感じられる。ものすごい埃だった。埃は砂漠
の動物を征服してしまつても、埃だけは平氣で吹いて来る。時間と言ふ味方が何
時かこの移住して来た人間を征服し、岩石記録の中に一切を葬つてしまふ自然の
一大意識さへ見せて、思ひ出したやうに吹いて来るのだった。

埃の間から二三間向うのブエラの仕事紹介所が見える。その前に、砂糖大根の
收穫人を募集しに来た自動車が二三台停つてゐる。埃の中を歩いてゐる人々も
る。彼等は假收容所時代からキャンブ生活に飽き、小遣もなくつたので、冬の
来るまで稼いで来るつもりで人員募集に應じてゐる人々だった。一噸一弗十仙は
安いと思つたが、懸命に働くと一日十噸は容易に出来ると言ふ経験者の話もあつ
たので、若い人々は身輕にブランケットを巻いて、迎へに来るトラックに乗って行く
のだった。キャンブの外には限られてはゐるが自由がある。五十年前の移民と大
差はないが、農家に寄生すれば酒もある。近くの町には賣春婦もゐるに違ひない。
屹度ある。

家の前に板を下すと邦男はぽつとした。部屋の中に入ると今度は意外に思った。
健一が旅に行く仕度をしてゐるではないか。

「おい、大根に行つて来るからね。」

邦男の姿を見ると、健一は冠せるやうに言った。

「何時？」

「今直ぐ迎へに来るだろう。」

「何處だ？」

「デンバーの近くだろうだ。五人で行くんだが、僕が一番弱さうだ。倒れたら帰つて来るよ。」

健一は笑つて説明した。乾き切つた埃の匂がする。一緒に行く人々は初めて逢つた人達だ。乾に仕事着を入れながら、健一は言った。墨で家族番号の書かれた袋にブランケットや枕を入れて、邦男も手傳つて上げるのだつた。渡米以来百姓をしたことのない健一が、どうして未知な人々と未知な土地に行く氣になつたのかと考へてみた。大根島の中で健一が大根ナイフを高く振り上げる。頭の中で戀人のことを考へてゐるので、堀り出しては葉を切つて行く大根の他は何も見えない。鈴を振ることを忘れた蛇が輪を作つて、健一の前で静かに待つてゐる。土も枯葉も蛇も同じ土色に見える。腰も痛い。何か動いてゐると氣がついたが、思はず踏んでしまふ。

ピーピーと迎へに来たトラウクのホンが鳴つた。

「欲しいもんがあつたら、歸りに買つて来て上げるよ。何かないか。」

「ないな、別に。」

二人は戸外に出た。トラックの上には、二三人の人がデヤケツを着てもう乗つてゐる。排氣管から出る煙は埃と先を競つて飛んで行く。健一は荷物を乗せて自分も飛び乗った。邦男は健一の袋を載せて下に立つてゐた。トラックは走り出す。埃が飛んで来る。タイヤから生じる埃も飛び、転任局の政策を予傳つてゐるやうに、早くキャンブから出て行けと、埃は吹いてゐるに違ひない。口中に入つた砂をガリリと噛んで、邦男はしばらく立つてゐた。

(二)

ガラガラと石炭を下す音が聞こえた。朝から何處へも行かず、寢台に寢るべつて小説を読んでゐた邦男には、キャンブがどうして活動を始め、どうして時を刻んで行くかには無関心だつたが、下された石炭が何を意味するかを意識してゐた。冬が来る。転任所での最初の冬がやつて来る。部屋の方の隅にどつしりと据ゑられたストーヴの感じは重い。冬のやうに重い。邦男は石炭を取りに戸外に出た。手に粗製の箱を持つてゐた。トラックの人々はもう石炭の周囲に集つて、一輪車やバケツや箱や桶の中に忙しく石炭を投げ込んでゐた。下された石炭の一点から、銘々の家に戻つて行く忙しさの中に、漫画映画の持つ滑らかなテンポがあつた。加州にゐた頃は石炭を使用したことはなかつたので、一冬どれだけの石炭を使用

するか知らない。知つてゐるのは、だゞ寒い思ひをしなだけ用の意することだけだった。人々は貪慾と思はれる程石炭を用意するのだった。戸外の前に置かれた大きな箱に一杯入れ、ストーヴの後の箱にも山盛りにした。食堂や便所や洗濯所に對しては、道德的な意識された氣持はあつたが、石炭に對しては、個人的な家庭的な親しみが湧いて来るのだった。そして石炭だけが、銘々の家で消費されても良い唯一の糧だった。

邦男も石炭入の箱を造つてストーヴの傍に置いてゐた。箱は少し大きいと思つたが、造り直すのも面倒臭いのでそのまゝにしておいた。彼は細工は不器用であつた。配給された寢台は寢心地が悪いので、自分と健一の寢台を板で拵へたが、寸法が合つてゐるだけで、やはり不細工だった。どうでも良いのだ。そんなものを造るのに時間を掛けたくなかつた。

邦男は石炭を取りに二三回通つた。箱はもう一杯になつてゐる。彼は又寢台にころんで小説を読み続けた。三時頃になると郵便配達タイム誌と手紙を、戸の横にぶら下げてある郵便入れに投げ入れた。健一からの手紙だった。封を切つてやはり寢ころんで読んだ。——大根の仕事にはもうなれたことや、一緒に رفتた爺さんが大根ナイフを振り上げて喧嘩したことや、便所がないので、野糞しなければいけないことや、野糞したあたりのフエンスに、使用した紙が引つかかり、はた／＼と風に揺れてゐることや、三哩離れた處に映画を見に行つたことや、白

人の雞をそつと捕へ、秘かに締め殺して夕食の御馳走にしたことが書かれてゐた。健一の主観が文章の底に流れてゐるので、邦男は面白く読むのだつた。十二月の始め頃には歸る。雪江さんはどうしてゐる。よろしく言つてくれと結んでゐた。ちうつと雪江の姿が邦男の脳裡に浮かんできた。彼女はカンテンで働いてゐる。買物へ行く度に見るが、「ハロー」と言ふ他は話したことがない。彼女の潤のある瞳は美しいと思つた。脊も高い。態度も温順しい。皆良い娘だと言つてゐた。讀書しない女の持つ平面的な表情――結婚したら安心して、遠慮なくママうしくなううと仄めかしてゐる皮膚は、滑らかに彼女の肉体を包んでゐた。

二三日すると、ちう／＼雪が降り始めた。取り残された粉石炭の上に積るのだつた。雪合戦が始まる。知つてゐる人や知らない通りがりの人にも投げつけては、加州の子供は喜んでゐた。食堂からの歸りに冷たい雪の肌ざはりを長靴の底に感じてゐると、後方から雪塊が邦男の頭上に飛んで来た。振り返つて見ると、誰か女がバラックの横に隠れた。雪江だつた。邦男は地上の雪を堅く、ぐつと大きく握ると、先刻隠れた時と同じ微笑を惹いて、雪江が再び現はれて来るのを待つてゐた。掌に握つてゐる雪は冷たい。雪江は隠れてゐるのではなく、そのまゝ向うに歩いてゐるやうな氣をするので、邦男は自分から我を折つてバラックの横に行つて見た。歩く處の雪は兩側に掃かれて戸口々々まで続いてゐる。土が雪の上にとろけとして、雪の純白を汚してゐる。其處には誰ゐるなかつた。自分の不自然な

動作を誤魔化す爲に邦男は後から歩いて来る二三人の少年に手の雪塊を投げつけた。少年は逆襲して来た。女の子も彼等に應援して来た。二三度、脊中に雪は散った。邦男は投げた。さうして逃げた。手は冷たい。耳よりも冷たい。先刻の自分の動作が馬鹿々々しくなつて来るのを感じるのだった。

雪はだん／＼と解けて行つた。解けると泥濘になると思つてゐた雪は、そのまゝ消えてしまつた。地面はかう／＼と凍つてゐたが、二日目にはさう／＼と乾き、乾くとふく／＼とした土に、風が吹いて来た。又埃になつて、もう／＼とキャンプは包まれてしまふ。

雪が降つたり、消えたり、埃になつたりしてゐるうちに思つたより早く、健一は歸つて来た。邦男の造つた不器用な椅子やテーブルや寢台を見て、健一は呆れてゐた。働きに去つた時には、土の上にも坐つてもかまはないカーキの労働服を着てゐたが、しやんとした半羅紗のパンツに新しい革のジャケットを着て歸つて来た。靴を開けて、何かかさ／＼してゐると思つたら、今朝コレットと平たい小壘に入れたウイスキーを出して、

「あるぞ、あるぞ。」

と振つて見せた。二ヶ月半も風雪に入らないからと言つて、約半時間おシヤワーを取り、戻つて来ると、寢台の中に潜り込んだ。

「やつぱり、キャンプは良いね。」

こんなことを言つてゐたが、もうぐつすりと寝てしまつた。静かに呼吸が聞える。小鳥の心理を邦男も思ふのだった。森の中から小鳥を捕つて籠に入れると、小鳥は朝晩の自由に慣れる。二三年後、小鳥を放してやると、小鳥は喜んで飛んで行くが、虫を握すにも競争しなければいけない。鷺や鳶などの恐ろしい敵もある。小鳥は又元の籠に戻つて来る。やっぱりキャンブが良い。キャンブの生活の方が良い。吞氣でのんびりとして。

健一は毎晩雪江の家に遊びに行つた。時々邦男を誘つて行つたが、雪江の父母、や姉弟と心安くなるにつれて、自分一人で行くのだった。

「あの娘もぴんと来んね。」

時々こんなことも言ふけれども

「日が暮れると、逢ひたくなる。」

と言つては笑ふのだった。こんな時には

「行つて来い。」

と邦男は、何も遠慮する必要はないと勵ましてゐた。

「毎晩行くの少し憂だね。」

「かまふもんか。」

さう言はれて見ると、健一も別にかまはないような氣がする。自分は若い。雪江の父母だつて、若い自分の心を察してくれてゐるだらう。愛の意味で自分も行

くのではない。淋しいからだ。今晚も行かう。かまふものか。行かう。健一は黙
て行つた。邦男は翻譯の勉強を始めた。途中で嫌になる。嫌になると何か別のも
とを考へてゐる。考へてゐることがどれもこれも空想や妄想と氣がつくと、又元
の翻譯を意識するが、筋を追ひながら、何時の間にか他のことを連想してゐる。

部屋に獨りゐることは淋しいことだ。邦男もさう思ふ。彼はテーブルの上の林檎
を取つて、表皮についてゐる塵を拭いた。食堂で貰ふ蜜柑や林檎を部屋に持ち帰
り、夜になると、獨りで食ふのだった。彼は獨り食は嫌だった。夜半に金を数へ
てゐる客番のやうな氣をする。獨身者が「獨身」を樂しむのもこの一人食である
かも知れないが、愛情もなく家庭の潤みもない食卓は邦男は嫌だった。二人以上
の人と食ふ方が、やっぱり楽しい。二人で食ふ時には、好きな女と。三四人の時
は遠慮のない家族と、五六人の時には親しい友達と、十何人になると、解けるや
うな賑はひの中に、忘れ物をしたやうな孤獨感が湧いて来るのは、自分一人だら
うか。家庭的な潤みが欲しい。自分の心が荒んでゐるのを邦男はよく知つてゐた。
假收容所にゐた頃、邦男は從弟と四人、叔父の隣の部屋に居た。時々、友達の
家に行くと、その母はよく珈琲や茶を入れて親切にしてくれた。戦争前の生活や
立退前の話なども語つてくれた。何時も大勢の人々と食堂で食つてゐた彼には、
かうして家で食ふ方が、人間的で、味はひがあつた。一度叔父に電氣ストローグを
貸してくれと言つたことがある。九時頃、珈琲が飲みたい時だった。叔父は何を

するのかと問ひ、珈琲を沸すと知ると、貸さないと言った。叔父は間食することは嫌だった。戦時だから我慢しなければいけない、辛抱せよと言ふのだった。邦男は叔父の拒絶を不満に思つた。時々珈琲ぐらゐ飲んで良いではないか。戦時故に荒んで行くキヤンプの生活に、家庭的な慰安を與へる爲に、時々皆と一緒に家で珈琲を飲むことがどうしていけないんだらうか。こんな小さなことで、叔父と喧嘩したくなかつたが、やはり不平に思つてゐた。

それから邦男はよく遊びに行つた。火の氣のない家に残つてゐてもつまらないと思ふのだった。友達之母は邦男に親切だった。食堂から「持ち帰る」と悪評された握飯や其の日の残りものをよく御馳走してくれた。ふつつりとのぼる茶の湯氣を見ながら、彼も家庭の温かさを感じるのだった。彼が部屋に帰ると、明日の幸福の爲は何物も犠牲にして、従弟は良い子になつてもう寝てゐた。机上の電燈を消して寝ると、自分の行爲を叔父は何と思つてゐるだらうかと考へてみた。転住所に移つたら、叔父と別れようとも思つた。叔父は良い人だ。渡米以来、叔父は色々と自分を世話してくれた。キヤンプに入つたからとて叔父の元を去るのはよくないと彼は思ふのだった。

「キヤンプに入ると邦男も妻つてしまつた。」

叔父は溜息のやうに時々言つた。それ以上に邦男の心は荒んでゐた。転住所に移ると、邦男は健一と一緒に小さい部屋を貰つた。何を勉強したか解らない時に

は、珈琲を沸して、そのぼっくりとたぎる音を楽しんだ。叔父にすまないやうな
氣をする。

(三)

「今晚、家で食べよう。」

健一は古新聞に包んだ雞をテーブルの上に置いた。包まれた雞の輪廓をぎゅつ
と締めつけて、新聞紙は変色したやうに濕つてゐる。

「いいね。」

「御飯を貰つて来てくれるか。」

「うん。」

邦男は仕方がないやうに答へた。雞を奢つたのは健一であるし、自分を料理す
るに何か手傳はねばいけないと、邦男は小使の役目を意識するのだった。

「誰かを呼ばうか。」

「雪江さんと呼んだらいいよ。」

「来るかしら。」

「友達と一緒にだったら来るだらう。」

「これか。」

健一は両手で大きな輪を作つて突つた。それは雪江の友人のグレースの足のこ

とだった。大根足！

「まあ、訊いて見るんだね。」

邦男にさう言はれると、健一も急に元氣づいたやうに戸外に飛が出した。健一が照れ臭さうに雪江を誘つてゐるのを想像しながら、邦男は雞の包を解いて見るのだった。乾燥してしまつたクリーム色の皮膚には、もう光澤も弾力も失くなつて、糞を含んだ鳥類の匂がするのだった。しばらくすると、がちやんと戸の閉つた音がして、もう健一は歸つてゐた。

「来るさうだ。」

「好いな。グレースも？」

「誘つて見ると言つてゐたから、多分一緒に来るさうだ。」

「ぢや早速料理しよう。」

「一羽で足りないだらう。刺身を少し買つて来ようか。」

「良いだらう、剥焼にしたら。」

「野菜物があるだらう。」

「食堂から貰つて来いよ。」

健一の足は軽くなつてゐた。彼は又戸外に飛出すと、黄色くなつた人蔘と小さなアニオンを四つづつ手に搦んで歸つて来た。邦男はバケツに水を搦んで来て、雞を洗ひ始めた。脂肪のない雞の肌ざりはズベ／＼としてゐた。取り残された

羽毛を一つ取り去ると、俎の上で雞の首をばんと切断した。庖丁で胸のあたりを軽く縦に挽くと、透き徹った肉の横に薄紫色の砂袋がざら／＼と覗き出した。それを裂かないやうに引き出すのである。鶏の肛門の周囲をぐるりと切り、肋骨と腹の間に庖丁を入れると、手を入れて内臓を引き出した。邦男の手には血や脂がべつとりと附いてゐた。雞の本當に殺されたと言ふ如き眼をした頭や、虚空を掴んだ足や、糞の一杯入った腸を邦男はストーヴの中に投入した。濕った腸はじ／＼と石炭の上で踊つてゐたが、美味しい煮えた肉の包を残して消えてしまつた。この陸軍用のストーヴはこんな時には何より便利だつた。時々唾を吐き込んだり、魚の骨や蜜柑の皮やWRAの無味乾燥な新聞を投げ入れると、何時の向にか綺麗に灰にしてくれる。彼は灰さへ捨てに行けば良かった、下の灰入には何時も灰は一杯で、氣がついても邦男は健一も自発的に捨てに行かうとはしなかつた。時々火が消滅してゐる時など、火を起す爲に、良心的に自分の責任であるかのやうに、誰かゞ捨てに行くのであつた。

「足るだらうか。」

健一は又訊いた。好きな女が来ると云ふので、なるべく澤山の御馳走を用意したいと思ふ焦燥しさが彼の心を嚙んでゐた。

「大丈夫だよ。差し、足らなかつたら漬物を出したら良いよ。」

それでも健一は不満だつた。やはり澤山あつた方が良い。体裁でも餘つて欲し

かった。

「もう四時だよ。店も閉つてゐるだらう。」

邦男は健一にこれ以上金を貰はしたくなかつたし、雪江を招待した彼の心を落着かしたかつた。健一は未だ未練があるやうに黙つてストーヴの中に石炭を投入した。火は急に熱を増して来た。邦男は平鍋をストーヴの上に置き、その中に滴した油が円く廣がつて行くのを面白さうに見てゐた。やがて鶏肉^{チキン}を入れ、褐色になるまでじー／＼と音をさせながら箸で転がして醬油と砂糖を入れ、水を少し滴して蓋をしておいた。甘い馨くストーヴの熱が室内に流れて、二人の吸覺を鈍感にさせた。後で人蔘とアニオンを入れさへすれば良いのだつた。

五時前になると、邦男はよく目立つ白い鍋を下げて御飯を貰ひに行つた。食堂で食べても、家で食べても同じことだつたが、鍋を持つてブラクの向を歩いて行くのが耻かしいのだつた。何となく「物貰ひ」を忌む先祖の血が流れて、絶えず彼の良心を呵責してゐるやうでもあり、たとへ、キヤンプの中であつても、獨身者が家で食ふことさへも、社會的には問題の種になるやうな氣がするのだつた。隣の道子は三人の子供と一緒に洗濯所の前で遊んでゐた。この娘に御飯を貰つて来てくれと、頼まうかと言はうとしたが、いくら子供であつても平氣では行けないだらうし、こんな時はやっぱり自分で行かねばいけないだと思ふのだつた。食堂の中に入ると、食べてゐるたウエトレス達は一斉に戸口を振返つた。ブラクの

人々が忙しきうに食つてゐる時と比べると、食堂は雑音もなく静かだった。皆の視線が自分に集中してゐるのを意識してゐても、邦男は流しでコップとコップがコツンと音をさせたのを、妙な寂然とした氣持で聞くのだった。

「家で食べるのですか。」

よく冗談を言ふ顔見識りの料理女が訊いた。

「はあ、済みませんが四人分下さい。」

「今晚は何ですか。この前は見合とか言つてゐましたが……」

「今晚は婚約です。」

邦男は笑つて答へた。後方で二三人のウエストレスがくす／＼と笑つてゐるのが聞えた。

「美味しい魚がありますが、持つて行きますか。」

「はい、下さい。」

料理女は御飯を一杯入れて、魚を四つ皿に入れてくれた。鍋を持つて、邦男は追はれるやうな早い足取りで歸つた。戸を開けて内に入ると、

「雪江達来だ来ないな。」

と健一が言つた。

「呼んぐ来たら良いよ。」

邦男は何でもないやうに言つた。健一は元氣よく出て行つたが、しばらくする

と歸つて来た。妙に黙つてゐて何處となく消然としてゐた。

「雪江さん達は後から来るのか。」

「うん。来ないさうだ。お母さんと食堂で食べると言つてゐた。」

「来ないなら、最初から来ないと言つたら良いのに。」

雪江のやつ、嘘つきだと言はうとしたが、邦男はそれを口に出さなかつた。どつかりと椅子に坐つてゐる健一も屹度同じことを考へてゐるに違ひない。もつと深刻に。先刻まで喜んでテーブルの上には置いた四つの茶碗と皿は、冷たい女の心のやうにやはり同じ位置に置かれてゐた。

「誰かを呼んで来ようか。」

「誰？」

「誰でもいい。」

健一は戸外に出た。こんな時には、二人がよくカード遊びに行く同じブラスクの移民の後続者と健一自身で輕蔑してゐた二人の歸世二世を呼んで来るのだつた。何故健一は雪江に惚れたんだらうか。結論を下すやうに邦男は考へてゐた。昨日までは知らなかつた兵隊と肩を並べて歩いたり、二世の眞似をして、自分も二世だと言ふぎごちない、不自然な態度をする歸米二世の雪江の何處が善いのだらうか。平凡な女の平凡な趣味を追うてゐるキャンパブルをした雪江の軽い約束は、彼女が純二世になる爲には平氣で破つても良いのだつた。

邦男が想像してゐた通りに、健一は二人の歸米二世を連れ來た。今日の雞肉チキンが自分達に示す友情だと二人とものにこ／＼してゐた。女の爲に用意されてゐた皿は、永い間の獨身生活に家庭の強かさを失つた胃袋を満す爲の食料に使用されてしまつた。健一が黙つて食つてゐるので、

「食べよ。食べよ。」

と邦男は繰返して言つた。その度に

「遠慮しないよ。遠慮したら損するよ。」

と二人は食べるのに忙しかつた。食ひ終ると邦男は皿や茶碗をバケツに入れた。かうして置けば誰かい洗ふ。健一が洗はねば邦男が洗つて来る。二三日かうしてほつとうかしてゐても、最後には二人の中の一人が洗つて来るのは確かだつた。食堂の鐘が鳴り出した。煙草を吸ひながら、邦男は鐘の音を聞いてゐた。母と一緒に食堂の前の行列に立つてゐる雪江を、健一は頭に浮かべてゐた。

編輯後記

△戦争以前最後の同人雑誌であつた「收穫」を知人から借りて讀んだ。色々鉄柵編輯の上に教はるところが多かつた。先づオーに「收穫」と「鉄柵」の間に横はる時代の大きな変遷を痛切に感じた。作品の上下を云々する事はさて置き「收穫」経多数の同人を持たない我々ではあるが、近き将来に於て勿らず「收穫」を凌駕する雑誌になるであらう事を信じてゐる。

△移民、文学史の立派な最後を飾りたい。

△創作が思ひかけなく長くなり、特別号にした。今後は六十頁以内に制限するつもりである。

△雑誌の範圍を廣くしたいと思ひ、俳壇、柳壇を設けたが、種々な理由で、川柳の一句も載せ得なかつた事を残念に思ふ。

△地中の彼方「春の感情」「扉」「時世の流れ」「城山

に題して」ともしが「水のうまさ」「春寒し」「畏橋のうち」右八篇は掲載出来なかつた事を詫がる。理由としては、紙数の都合にも依るが作品がレベルに達してゐない。或はもう少しだといふ内容の問題も一つの理由であつた。高くとまつてゐると言はれるかも知れないが、雑誌発行の意義が何處にあるかを諒解されれば肯いていただけると思ふ。憤慨したり、失望したりせず、投稿を続けられんことを切望する。

△創刊号に比して外装は落ちるが内容の幾分か充実して来た事を喜ぶたい。

△多忙な身体を酷使して晝夜鉄筆に努力してくれた大城嬢にはたゞ／＼感謝に堪えない。

△其他同人以外の人々の好意ある援助、感謝する。

△三号は七月初旬発行の予定。

昭和十九年 五月十日 印刷
昭和十九年 五月十五日 発表

発行者

鉄柵同人

編輯責任者

山城正雄

野沢襄二

河合一夫

鉄筆

大城真砂子

印刷所

一〇一三A

発行所

ソールレーキ

鉄柵社

一〇〇一B

鶴嶺同人類詠